「モンスーンの世界　日本、アジア、地球の風土の未来可能性」

安成哲三　著
中公新書，2023年5月
320頁，1265円（税込）
ISBN 978-4-12-102755-9

「著者の多彩な研究成果を踏まえつつ，大気科学や自然地理の観点でアジアモンスーンが語られているのであろう」という勝手な，かつ，安直な先入観を持ってこの本を開いてはいけない．なぜなら，自分の浅はかさを悔やむことになるからだ．

本書では，俳句を交えつつ日本の季節の移ろいを紹介することから話が始まる．さらりと書いたが，「モンスーンの世界」と題された本書の第1章でいきなり四季折々の俳句が散りばめられているのである．正直，私は驚きを隠せなかった．この時点ではまだ，これが本書の本質を成す後半部分への布石であることを知る術はない．

第1章にて日本の四季を概観した後，第2章では地球全体の，第3章ではアジアモンスーン域の気候形成プロセスについてそれぞれ解説している．そして第4章では，アジアモンスーンや熱帯太平洋での大気海洋相互作用との関係に着目しつつ，再び話題が日本の気候に戻ってくる．さらに第5章では，気候と生物圏との相互作用系について論じている．私が本書を読む前に抱いていた先入観の通りであれば，本書はここで結びとなる．だが実際には，ここまでで本書の半分にも満たない．

では，この先には一体何が記述されているのか．第6，7章では，稲作水田農業を軸に，日本を含むモンスーンアジアの「風土」について話が展開される．長い歴史の中で変容する社会構造や経済，また，和歌や俳諧・俳句に残された人々の自然観からモンスーンアジアの「風土」に対する著者の見解が綴られていく．さらに，産業革命以降にみられるアジアの近代化についても，水田農業で構築された社会システムや人間性に触れつつ，「風土」の変化という観点で考察している（第8章）．そして，現在我々が直面している地球温暖化に関わる諸問題（第9章）や，それに対する「風土」を活かした経済システムおよびエネルギーの未来可能性（終章）についての考えを示し，本書は締めくくられる．

特に第6章以降は，著者の長年の経験や博学多識ぶりが遺憾なく発揮されており，この本の真骨頂ともいえる．むしろ，著者が真に書きたかったのは第6章以降ではないかとさえ思える．読み終えた後に本を閉じ，再度表紙に目を向けると，ふと副題が目に留まった．日本，アジア，地球の風土の未来可能性．なるほど，私の読後感はあながち間違いではなかったのかもしれない．

さて，本書を読み進めると，第2章に入った時点で内容が難しいと感じ，読むのをやめようかと迷われる方がいるかもしれない．一度立ち止まって「はじめに」をよく読んでみてほしい．『読みにくい章は飛ばして読み，必要に応じて，また戻って拾い読みするという読み方でも，内容は十分に理解していただけるよう，できるだけ平易な記述に心がけたつもりである』と書かれている（実は，私はこの1文が本書の中で最も印象に残っており，著者の人柄が垣間見える素敵な1文であると感じている）．ここは著者のご厚意に甘えて，難しいと感じたら一旦その章は飛ばし，他の気になる章を読んでみることをお勧めする．既出の事項であっても，要所要所で丁寧に繰り返して記述されているため，途中から読んでも問題なく楽しめるだろう．

本書は誰もが手に取りやすい，持ち運びに便利なサイズの新書である．アジアモンスーンに興味を持った初学者が椅子に腰を据えて読むのも良いし，睡眠前にベッドの上でリラックスしながら読むのも良い．節が細かく分けられているため，通勤途中の電車内で隙間時間を使って読むのにも適しているだろう．また，本書を携えてモンスーンアジアを訪問するのも乙である．

「おわりに」には，構想から10年以上の時を経て出版に至ったと記されている．著者のこれまでの研究人生（いや，“研究人生”ではなく“人生”かもしれない）が詰め込まれた珠玉の1冊を手に取り，自分のスタイルで読んでみてはいかがだろうか．きっとモンスーンアジアに住む一員として何か感じるものがあると思う．私は，自分の中で未だぼんやりとしている「風土」について体得するために，これまでとは違った視点を持ってモンスーンアジアを巡ってみたい．

（海洋研究開発機構　杉本志織）

© 2023　日本気象学会